鄧雲郷著／井口晃・杉本達夫訳

北京の風物

民国初期

東方書店

鄧雲郷著／井口晃・杉本達夫訳

北京の風物

民国初期

東方書店

著者略歴

鄧　雲郷（Deng Yun-xiang）

1924年　北京に生まれる。

1947年　北京大学文学院中国文学系卒業後，多年，文学史の研究と教育に従事。現在上海電力学院人文学科教学研究室主任。中国魯迅研究学会会員，中国紅楼夢研究学会会員，江南詩詞学会理事。

近著に『紅楼識小録』，『燕京郷土記』等がある。

現住所　上海市河間路1040弄9号

訳者略歴

井口　晃（いのくち　あきら）

1934年　福岡県に生まれる。東京外国語大学，東京都立大学大学院に学び，現在中央大学文学部教授。中国現代文学専攻。編訳書に，『中国大躍進政策の展開』（共編）『星火燎原』（訳）『中国現代作家選・劉賓雁《人妖之間》』（編注）など。

杉本達夫（すぎもと　たつお）

1937年　京都府に生まれる。大阪外国語大学，東京都立大学大学院に学び，現在早稲田大学文学部教授。中国文学専攻。79年春から2年間，北京で暮らす。訳書に，『ラクダ祥子』『水滸伝』（共訳）『荀子』など。

北京の風物　民国初期

一九八六年七月十五日　初版第一刷発行

著者●鄧雲郷
訳者●井口晃・杉本達夫
発行者●安井正幸
発行所●株式会社東方書店
東京都千代田区神田神保町一の三　〒一〇一
電話　〇三―二九四―一〇〇一
営業電話　〇三―九三七―〇三〇〇
振替　東京四―一〇〇一
印刷・製本●共同印刷株式会社

定価＝一八〇〇円

©1986　井口晃・杉本達夫

Printed in Japan.
ISBN4-497-86166-x C0098

乱丁・落丁本はお取替えいたします。
恐れ入りますが小社出版部あてにご返送下さい。

日本語訳序文

鄧雲郷

拙著『魯迅与北京風土』［日本語版『北京の風物』］は、刊行以来、諸先生や友人たちから絶えずお褒めにあずかり、まことに喜びにたえない。聞けば日本の東方書店では本書を翻訳するご意向の由、これはなおさら嬉しい便りで、喜びのついでに、さらに一言しゃべりたくなり、お許しを得て日語訳のための序文を草する次第である。

まことに時の経つのは速いもので、思えば本書を書き始めた頃から、瞬く間に六、七年が過ぎてしまった。王羲之［晋代の書家］は「蘭亭集序」の中で「つかの間に、はや旧跡となる」と言い、さらに「後世から今日を見れば、今日から往昔を見ると同様であろう。ああ悲しいかな」と述べている。人生はすべてこのように絶えざる嘆惜のうちに過ぎてゆくものらしい。先人の生活を心底から懐しむことができてこそ、眼前の生活をより深くいとおしむことができる。まして魯迅先生のように、人びとに敬慕され

て然るべき人にあってはなおさらである。数年前、わたしは北京宣南（シュアンナン）［宣武門（シュアンウメン）から南一帯をいう］の右安門（ユウアンメン）のそばにもうひとつ、何とか落着ける小さな部屋をもっており、夏休みで北京に帰ると、この喧噪から遠く離れた場所で、幾日か心静かに暮らしていた。ここは南半截胡同（ナンバンチェフートン）、北半截胡同（ペイバンチェ）［魯迅の旧居の近く。本書一四八ページ参照］からさして離れてもおらず、わたしは夕方涼しくなると、この一帯に散歩に出かけては、長い間寂れたままで傷みの激しい、もとの紹興会館（シアオシンホイクアン）や広和居（クアンホチュイ）［一〇一ページ参照］の門前を徘徊した。蟬が大きなエンジュの古木の枝で鳴きしきり、西日がかつての広和居の門を淡く照らしており、わたしは深い感慨にふけった。魯迅先生はこの年を経たエンジュの下を幾たび通り過ぎたことだろうか、広和居の門を幾たび出入りしたことだろうか、このエンジュも、この門も、おそらく先生を忘れてはおるまいな……と。もちろんこの蟬の声も、この日射しも、先生が耳で聞き目で見たものではなく、今の新しいそれではあるが。

四、五年前になるだろうか、ある日もとの広和居の前に来てみると、門が開いているので、わたしはのこのこ入っていった。中はひっそりと静まり、数世帯の家族が住んでいて、細長い庭の両側には、東昌紙を貼った方眼形の格子窓が、昔に変らぬ姿を見せていた。ところが一年たち、もう一度足をふみ入れてみると、ああ何たる変りよう、窓の前にもうひとつ、赤レンガでおよそ不調和な小屋が建てられ、細長かった庭が姿を消して、曲りくねった狭い路地に変形しているではないか……。

今やすべてが変りつつある。魯迅先生が広和居に出入りした時代は、ますます遠ざかり、変化はますます激しくなる。紹興会館であれ、広和居であれ、これら魯迅先生が常づね行き来していた場所も、や

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

がては再び建築現場となって、大きなビルが建てられることであろうし、そうなれば魯迅先生のころの生活の雰囲気は、もはや想像するすべもなくなろう。これは必然の流れであるが、しかしそれらが消えてゆくことは惜しみて余りある。王羲之が嘆いたのは、まさにこのことではないか。

些か文字の跡を留めて、後世の人びとの想像に供するというのも、けっこうなことではないか。

半世紀も前、わたしは北京に住んでいたが、まだ児童七分に少年三分の年ごろ、つまりはもうすぐ中学に進もうというころで、人生で記憶力がいちばん旺盛な時期だった。そのころはまだ魯迅先生が過ごした時期の環境、雰囲気、風土、人情等、いずれもさしたる変化がなく、甘石橋（カンシチャオ）の異馥軒（イフシュアン）［線香やローソクを商っていた店］の入口の、かつて庚子の戦火［義和団事変］をあびた天を衝く看板が、まだ高くそびえ立っていた。毎日午後三、四時ごろになると、「ワンタァン……ホカホカでござァい」という売声が、路地の間を流れてゆくのが聞こえた。あの淳朴で温い「毎度ありィ」という声が、どこへ行っても聞かれた……。これらはすべてわたしの大脳のデータファイルに実に鮮明な記号を残してあり、ひとつ懐旧のボタンを押すと、たちまち記憶の蛍光板に現れてくるのである。何と懐しいことだろう。だが、「漁陽の鞞鼓（ヘイコ）地を動（ゲドモ）して来たり、驚破す霓裳羽衣（ゲイショウウイ）の曲」［白居易「長恨歌」の一節。安禄山の乱が玄宗や楊貴妃の長安の安らぎを破ったことを述べた部分］という詩句そのまま、蘆溝橋（ルーコウチアオ）に起った事変の砲火は、わたしの脳裡の風土と雰囲気を打砕いてしまった。

『魯迅日記』を読んでいると、一日一日の行先、ひとつひとつの場所の立たずまい、わたしがよく知っているひとりひとりの先生たちが無性に懐しく、何だか今なお昔のままの環境で、昔のままの雰囲気

で、先生がたが楽しげに学問の話をしているのを、そばで聞いているかに思われてくる。これは何と甘やかな思い出であろうか。かくてわたしは止むに止まれずこの本を書いた。大著というには程遠く、文豪の如き高論は述べるべくもないのであるが、しかしわたしは思いのたけを込めて書いた。

北京の風土、風俗を書いた本は、明清以来、劉同人の『帝京景物略』から富察敦崇の『燕京歳時記』に到るまで数多いが、これらはいずれも簡略に過ぎ、また多く人事に偏しているように思われる。読者はいつでも余りに短いと感じ、読んで物足りず、考えても具体的に理解できないのである。たとえばキリギリス一匹、唐ごま一個の値段はいくらか、どの本にも書かれておらず、当時の人びとの生活の細部や雰囲気を、より具体的に想像するすべがない。何と残念なことか。しかもなお残念なことに、五、六十年前の時期には、そうした著作がいっそう少くなっていた。三十年代前期、袁良氏(ユアンリアン)が燕都の市政を司っていた時、『旧都文物略』なる大冊が編まれた「北京市政府刊」。写真が多く、図表もふんだんに使われていた。だが玉に疵とも言うべきか、程なく袁氏が下野して市長が交替した結果、同書の「技芸」「雑事」の二部門が匆々に切上げられて、民間の生活の様相を保存しうる資料が極端に手薄になっている。同書の編者でわずかな生残りである陳声聡(チェンシオンツォン)先生はもはや八十九歳の高齢であるが、そのことを今なお残念がっておいでである。その他に北京風土を書いた本を挙げるとなると、いよいよ思わしい物が見当らない。わたしのこのささやかな本が、そうした不足の万分の一でも埋めることができることを、心底から願ってやまない。

日本には風土民俗を研究する学者が多く、そのうち少なからざる人びとが、北京の風土民俗に関して

専門的研究を進めてきた。わたしの乏しい知識で言えば、青木正児氏の編んだ『北京風俗図譜』、東北大学名誉教授内田道夫氏の著作『北京風俗図譜』［青木正児が編んだ図譜に内田道夫が解説を施し、『北京風俗図譜』1、2と題して、平凡社刊「東洋文庫」23・30に収められている］、陳舜臣氏の『北京の旅』等がある。詩経に「嚶と鳴くは、その友を求むる声」という一句がある［小雅・伐木］。日中友好の今日、このささやかな本が日本語に訳されて、広範な日本の読者とまみえることができるのは、わたし個人の喜びに止まらず、両国の友好往来、文化交流を促進する上にも、些かの意義をもつ。ここに、関係各位のご苦労に感謝するとともに、日中人民の永遠の友好の精神と、嚶々と鳴いて友を求むる願いをこめて、日本の風土民俗研究者各位のご教示をよりいっそう希望する次第である。

以上をもって序に代える。

一九八四年十一月二十七日。滬東の寓居の南の窓辺にて記す

凡例

一、本書は鄧雲郷著『魯迅与北京風土』（北京、文史資料出版社、一九八二年刊）からの翻訳で、原著の約六割に当る部分を訳出した。

二、文中（　）内は原著に記されているもの、［　］内は訳者が加えた注釈である。

三、引用文は文語口語をとわず、すべて現代語に訳した。

四、引用された『魯迅日記』は引用に即して、かつ多少くだいて訳してある。

五、人名、地名、料理名、書名等々、多くのルビが使ってあるが、表記はすべて東方書店方式による。

六、挿絵は『北京追想』（東方書店刊）の著者臼井武夫氏の手を煩わした。紙上を借りてお礼を申しあげる。

序

謝国楨

かつて上海で王西野（ワンシーイエ）先生をお宅に訪ねた際、鄧雲驤（トンユンシアン）「雲郷」氏と知合って、かれの手になる随筆を読んだところ、文章がいかにも雅趣に満ち、並ならぬ見識のほどが見てとれた。そんなことから話が合い、語りあううちに、かれとわたしが北京の同じ学校に学んだ仲であることを知った。異郷での出会いは親しみが倍加する。ほどなくわたしは北京に戻り、雲驤氏もまた京師に来て、再会を喜びあった。何か新しい作品をお持ちかとたずねたところ、かれは「魯迅と琉璃廠（リウリチャン）」なる一篇を取出して見せてくれた。わたしは本好きにかけては病膏肓の口であって、琉璃廠をぶらつく味はよくよく承知している。かれの一篇を読んだところ、事実を引きつつ、いかにも風趣豊かに語っている。わたしはさっそく『人民日報』文芸編輯部の姜徳明（チャンドーミン）氏に紹介し、これは間もなく『大地』「人民日報の文芸欄。ただしこれは人民日報社発行の雑誌『戦地』増刊の誤り」に掲載された。かれはそれから続けて幾つもの文章を書いたが、いずれも魯迅

の北京時代の事蹟をたどったもので、見事にひとつの世界を織り成している。それらは発表後、大いに読者の好評を得た。そこでそれらばらばらに発表した文章をひとつに集めて、『魯迅与北京風士』なる一書に編み、文史資料出版社から出版の運びとなったのである。本書は著者の魯迅先生を慕ってやまない思いのほどを表すとともに、それにも増して、人民大衆の心に魯迅先生の精神に対する敬慕の情を呼起こすことができるだろう。

わたしが思うに、魯迅先生はひとりの人間であり、しかもごく当り前の人間であって、酒も飲めばタバコも吸い料理店にも出入りした。だが先生は「硬骨」の持主であり、「眉を横たえ冷やかに対す千夫の指、首を俯して甘んじてなる孺子の牛」という、暴力を恐れず悪徳勢力と戦いぬく精神をそなえていた。先生の生活のわずかな風趣ある一面しか見ないとしたら、先生の戦いぬいた生涯の意義を見失うことになる。だから雲驤兄から序文を書くよう言われたとき、「下問を恥じず」[『論語』]とはいえ、菲才のほどが恥ずかしくて、とうてい引受けられなかったのである。ところが少し前、『北京晩報』紙上で、かれが魯迅先生の「太炎先生に関する二、三の事」[『且介亭雑文末編』に収録]を読んで書いた一文を見かけた。その中でかれは清末の西太后那拉(ナラ)氏が沈藎(シェンチン)[清末維新派のひとり。一九〇三年「露清密約」を暴露し、捕えられて杖刑により死亡]を杖刑で撲殺した一件に触れて、那拉氏が政治を一手に握り、清朝の祖訓や「大清律」を鼻であしらい、罪もない志士たちを杖で撲殺していた状況、および志士沈藎が壮烈な最期を遂げた様を語っていた。その文章を読んで、わたしは思わず尊敬の念に打たれ、己れの頑なな心を悔いて、急遽(きょ)筆を取り、この「序文」を書いて、「わが過ちを明らかにしておく」[『左伝』]次第である。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

雲驤兄もきっと許してくれるだろう。

残念なのは、かつて魯迅先生から望外のお賞めをいただきながら「一九三四年に出版した『明清之際党社運動考』について、魯迅は「〝題未定〟草（六至九）」（『且介亭雑文二集』に収録）の中で、一節を引用しながら好意的に言及している」、南北に遠く隔たっていたために、ついに先生に会う機会をもてなかったことである。その一方で、学問が浅薄で、体系らしきものも作れず、ただ無為に日を過ごして、若き日に努力を怠り、何らの成果もないまま老いの日を迎えたことが、まことに恥ずかしく、会わせる顔がないという思いもある。十年の動乱の時期「プロレタリア文化大革命をいう」が来て、わたしは隔離された。罪を悔い反省する期間になって、暇ができたから、わたしはようやく魯迅先生の著作を読んで、自身の学問と生き方の方向を明確に摑みはじめた。

明清時代の野史や筆記は、王朝の正統派たる史官が書いたものではないから、さほどに事実を歪曲しておらず、したがって歴史的事象や社会の真相をどれほどか反映している。そのことがわたしに、少しわかりかけてきた。さらに、漢魏以来の石刻画像には、当時の社会生活が豊かに包含されており、魯迅先生の随想、書信、日記にはそのことが幾度も触れられている。魯迅先生は四海波立ち、国また騒がしい時代の、包囲と反包囲の戦いのさなかにあって、敵との戦いに忙しかったから、これらの分野の仕事をするゆとりがなかった。けれども魯迅先生は、「ひまが出来たら、やってみたい」と語っていた。そのためわたしは、己れの学識の乏しさをも考えず、たっぷりと閑に恵まれた歳月の中で、この二分野の資料を一わたり探し集めて、分類整理し、正しい視点と方法の学習を試みつつ、草々とまとめあげた。

それらは粗雑な代物ながら、幸いにして、いずれもすでに書物となって世に出ている「『明代社会経済史料選編』（福建人民出版社）と『両漢社会生活概述』（陝西人民出版社）。その後『明代農民起義史料選編』『両漢碑刻磚瓦拓本集録』『明末清初的学風』『史料学』などがある」。専門家の教えを請いたいが、当然ながら博雅の士には譏（そし）りを受けて、識者の物笑いになることだろう。だがわたしは次第に魯迅先生の遺教に感化されて、自分で自分を解剖するようになった。思えばわたしの愚かしい行為は「阿Q」に似ている。阿Qを引いて反面教材とし、これを鏡として己れの姿を映すとき、己れのいかにも世間を知らない、間抜けな様が見えてくる。とはいえここには、趙旦那（チャオ）の如き人物が現れてお前に革命は許さんぞなどと宣うこともあるまい。雲驤はわれを知る者である。それゆえ気安くかれに如何と問えば、定めし破顔一笑することだろう。

一九八一年十月十四日

北京の寓居・瓜蔕庵にて記す

〈注〉謝国楨（シェクオチェン）＝一九〇一年、河南安陽に生る。北京図書館その他の勤務を経て、解放後は天津の南開大学に移る。現教授。専門は中国史および目録学。

北京の風物◆目次

◆日本語版序文――鄧雲郷
◆序――謝国楨

一、琉璃廠（リウリチャン）の店
(1) 本屋あれこれ……3
(2) 本の値段……11
(3) 碑帖屋と古銭屋……18
(4) 手拓の芸術……26
(5) 南紙店……32
(6) 骨董その他……40

二、廠甸（チャンティエン）の面影
(1) 廠甸の遊覧コース……50
(2) 廠甸の書攤（シュウタン）……56
(3) 画棚（ホアポン）めぐり……60
(4) 廠甸の要貨（シュアフォ）……66
(5) 廠甸の代表的な要貨……70

三、酒のある店

(1) 飯鋪(ファンプー)、飯館(ファングアン)、飯荘(ファンチュアン)……78
(2) 給仕人の神技……85
(3) 小宴会向きの店……89
(4) 南の味と郷土の味……95
(5) 百年の老舗―広和居……101
(6) 東城西城の飯荘……109
(7) 茶楼とうまい点心(ティエンシン)……113
(8) 公園と茶が飲める店……118
(9) うまい酒、うまい料理と氷……124
(10) 料理店の浮き沈み……131

四、生活雑摭

(1) 会館……138
(2) 家屋……148
(3) 街路……161
(4) 乗り物……174

(5) 慶弔……185
(6) 廟会（ミアオホイ）……195
(7) 小市（シアオシ）……202
(8) 市況……211
(9) 汽車……219
(10) 飲食……230
◆後記――鄧雲郷
◆跋――王西野
◆訳者あとがき

插画　臼井武夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com